『堀江物語絵巻』諸本の位置
―又兵衛工房における粉本使用とその意義―

京都大学 筒井 忠仁
TSUTSUI Tadahito

現在各所に所蔵される『堀江物語絵巻』（以下「堀江Ⅰ」）は、いわゆる「又兵衛風」の表現様式を持つ「古浄瑠璃絵巻群」の一つとして知られる。本作品は、現在 4 巻分と断簡 1 図が知られるのみであるが、料紙装飾の共通性などから、同じく「古浄瑠璃絵巻群」に属する『山中常盤物語絵巻』や『浄瑠璃物語絵巻』同様、いずれも越前松平家の注文によって制作されたと考えられている。

ところで、堀江物語には、もう一つ MOA 美術館所蔵の『堀江巻双紙』（以下「堀江Ⅱ」）と呼ばれる絵巻が存在する。やはり「又兵衛風」の表現を持つこの絵巻は、現存する 12 巻で物語が完結しており、「堀江Ⅰ」の元の姿を想定する上で重要な位置を占める。両者を比較すると、いくつかの場面で図様が一致するのだが、「堀江Ⅱ」よりも多くの場面が絵画化されている「堀江Ⅰ」は、元は 12 巻以上の膨大な量であったと推測される。そして、辻惟雄氏によれば、様式上、制作年代は「堀江Ⅰ」が「堀江Ⅱ」に先行すると考えられることから、両者の関係については、次のような想定がなされている。すなわち、「堀江Ⅱ」は、「堀江Ⅰ」の図像を粉本として用いながら、縮小再生産したものであると。

だが、本発表では、いくつかの理由から、必ずしも「堀江Ⅰ」→「堀江Ⅱ」という図式は成り立たないことを述べたい。例えば、長国寺本「堀江Ⅰ」の館の建設場面は、『松崎天神縁起絵巻』の図像からの転用がみられ、それを改変して用いているのであるが、「堀江Ⅱ」の同じ場面では、やはり『松崎天神縁起絵巻』の図像を用いているものの、図像はほぼそのまま用いられている。つまり、図様の近似性からいえば、『松崎天神縁起絵巻』→「堀江Ⅱ」→「堀江Ⅰ」となり、「堀江Ⅱ」は、必ずしも「堀江Ⅰ」の図像を粉本として用いているわけではないのである。

このような事実を踏まえるならば、両者の関係として考えられるのは、次の二つの場合である。すなわち、「堀江Ⅱ」から「堀江Ⅰ」が制作されたか、あるいは、共通の粗本となるものが存在するかである。だが、様式的に「堀江Ⅱ」を「堀江Ⅰ」に先行させることは困難である。早急な結論は避けなければならないが、ここでは、共通の粗本となるものの存在を想定したい。もちろん、完成作が現存しない以上、それはおそらく広い意味での粉本のようなものであったと考えるべきであろう。そしてそれらの用い方、および制作の統括者の違いによって、図様の違いが生まれたと推測される。恐らく、「堀江Ⅰ」が又兵衛福井在住時代の又兵衛の統括による制作、「堀江Ⅱ」は又兵衛江戸移住後の弟子による制作であることを示すものではないだろうか。この点を、他の作品との比較や、史料をもとに論証し、工房における粉本使用のあり方について考察を試みたい。